

泉州広域母子医療センター

周産期センター産科医療センター長 萩田和秀

Sensyu Regional Medical Center for Women's and Children's Health

「安心安全のお産」をモットーに

泉州南部(貝塚市以南)でお産ができる施設は数えるほどしかありません。施設は増えることもなく、医師数は増えるどころか、減る方向にあります。

2006年頃の泉南地区は、新医師臨床研修制度の影響を受けて、公的病院における産婦人科を含む全国的な医師不足でした。りんくう総合医療センター及び市立貝塚病院の産婦人科に医師を供給する大学側が支えきれなくなり、産婦人科医療が崩壊寸前にありました。

そこで近隣の公立病院が集約化を行い、泉州広域母子医療センターの体制が確立されました。既存の施設をできるだけ活用し、婦人科医療センターは市立貝塚病院に、産科医療センターと新生児医療センターをりんくう総合医療センターにおくことで産婦人科医師不足を補い、また近隣市町村(貝塚市・泉佐野市・泉南市・阪南市・熊取町・岬町・田尻町)が協力して産婦人科医療の安定の確保に乗り出した結果です。

越境的な医療集約は、公立病院では補助金など政治的な考え方が加味されるため、実現には難しいとされます。医療の現場では政治的な考え方を背景にしながら、「安心安全のお産」のローガンに込めるために様々な取り組みをしてきました。そこには、スタッフ



(医師、看護師、助産師)が必要になってきます。泉州広域母子医療センターの誕生によりスタッフを確保することができ、体制作りを行ってきました。

スタッフが充実しないと、できないことがあります。一つ目は、出産(お産)です。お産は予定通りに行えることはなく、どちらかといえば救急の世界です。いつでもお産ができる体制でないといけません。一言でお産といっても、通常分娩(様々な分娩法)、帝王切開などその時々、その瞬間の母子の状態でお産の方法が変わってきます。時々刻々と変わる母子の変化に対応できないといけません。そのためにりんくう総合医療センターでは2名の産科医と1名

の小児科医の体制で当直を行なっています。

他院でお産を進めていても、時々刻々と変わる母子の変化に対応できない場合は、対応できる施設に送ることになります。近隣の産科病院でお産をする方が多数であっても、地域のお産の安心安全を支えていく体制は必要で、りんくう総合医療センターの泉州広域母子医療センターはその受け入れ口としての役割を担っています。

昨年秋、近隣のお産ができる施設の先生の急な訃報が飛び込んできました。その施設でお産を予定していた妊婦さんの中には予定日寸前の妊婦さんもおられ、これからともにお産に挑もうとして選んだ施設でお産ができなくなっていました。先生の遺志をついた施設がそれぞれ受け入れを行い、りんくう総合医療センターでも40名以上の受け入れを行っております。これは地域の周産期連携が普段からできているから、妊婦さん自身が受け入れてくれる施設を探すことなく、スムーズな受け入れができました。

スタッフが充実しないといけないことの二つ目は、ハイリスク分娩に対応できることです。ハイリスク分娩とはすなわちお産に危険性が伴う状態で、様々な合併症や社会的背景の問題など多種多様な状況が考えられます。甲狀腺疾患、糖尿病、血液疾患、腎疾患や脳血管疾患などの合併症妊娠は、母親ともに危険な状態になる場合があります。当科では各科と連携し、いざという時に出来るだけ迅速に対処できるようにしています。これはりんくう総合医療センターだからできることです。

三つ目は、救急に対応できることです。生まれる前、生まれた後も出血など様々な急な疾患が発症するため、休日夜間救急の開設が必要になってきます。これも365日24時間待てない状況に対応するために必要になってきます。出血などでショック状態になった患者さんにも泉州救命救急センターと協働で対処できるように全国

に先駆けてコロナレションをしています。分娩後などに出血が止まらない、妊娠高血圧症候群で母体が危険になるなど、命にかかわる状態になったときに、救命救急センターとのコラボレーションで全国でもトップクラスの救命率をあげています。

お産は病気ではありません。問題のない方々のお産大歓迎、もちろん自然分娩を提唱しております。しかし、正常に進むべきところから1歩間違えると病気に、また多くの医療介入が必要となる事態になることがあります。泉州広域母子医療センターはこのような事態にも安全にそして地域の皆様方により安心してお産していただけるように取り組んでおります。

「りんくう」で出産する意味

『他院は食事が豪華』『りんくうは制限が多い』『という声を耳にします。食事については、2



▶当院オリジナル 泉州こだわりタオルのおくるみ

016年6月より妊産婦食の見直しを図り、献立・食器の全面リニューアルを行いました。「おいしくなったと、皆さまに喜んでいただいております。他院に負けないような妊産婦食の取り組みを行っています。

制限については、安心安全のお産を守っていくために必要な事柄です。しかしながら、生まれてくる子どもを待ち望んでいる方々の声をとられ、以前よりも少し緩和し、喜びを分かちあえるような環境にしました。

また、ささやかですが、当院からの出産のお祝いとして、生まれたベビーにプレゼントをご用意しました。

泉州こだわりタオルを素材として、当院オリジナルのおくるみを作成しました。これは、おくるみやタオルケットとして使っていたのだと、大きくなってからもバスタオルとしても使っていた、大きく愛され続けるものをめざしました。

出産は人生の一大イベントの一つ。その中で期待を背負い、不安に襲われ、その日々の変化を受け入れていく。産婦人科医の仕事は、妊婦さんの感じるあらゆる不安や心配を引き受けて、何かあったときに十分な対処ができるように入念に準備しておくこと。そして母子ともに健やかな状態で赤ちゃんに産まれてきてもらうこと。そんな、安心安全のお産をモットーに心がけています。

分娩時の付き添いについて

お産の時、サポートして頂けるのは成人の方に限ります。(分娩エリアに入室いただけるのは24時間可能ですが、1名ずつでお願いします。)

母児同室のお母様の面会について

- 面会時間 ◆平日・土日・祝日 12時~20時
- 母子同室中のお部屋での面会は時間内であれば親族どなたでもご面会いただけます。
- また、0歳からのお子様も同時にご面会ができます。ただし、赤ちゃんの安全面から、1名~3名ずつ交代でお願いしています。
- また、マスクを持参していただき、必ず着用をお願いします。(※マスクを持参されていない場合はお部屋に入ることが出来ません。また12歳以下のお子さまは健康チェックをお願いします)
- 上記以外の方(ご友人)の面会はデイルーム(6階エレベータ裏)でお願いします。



▲「コウドリ」モデルの萩田先生

「お母さんが心配なことや不安なことは、全部僕らが引き受けるからね。だからお母さんは安心して産んでください。案するよりも産むがやすいですよ」

泉州広域母子医療センター

Sensyu Regional Medical Center for Women's and Children's Health

●周産期センター(産科・小児科)

平成20年4月より、りんくう総合医療センター産婦人科と市立貝塚病院産婦人科はひとつの組織として統合されました。りんくう総合医療センターは「周産期センター」として 泉州地域の産婦人科医療を担う拠点病院として運用しています。

詳しくはwebサイトをご覧ください。